

No. 1039

# たとえぼくに

# 明日はなくとも

閉ざされた室の中で、ひっそりとひとりの少年が聖書に読みふけている。東京都日野市に住む石川正一君18歳。足はもう動かない、手も顔まであげることができなくなった。日一日と身体力がなえていく。病名は筋ジストロフィー、筋肉に栄養が行きあたらないためにおこる難病だ。治療法はいまだなく、20歳までに死を迎える。昭和30年11月13日、正一君はこの世に生を受けた。外見的になんらかわったところもなく成長し、幼稚園に入園、しかしそこで歩行の欠陥など遅れを指摘される。度重なる病院通いの末、筋ジストロフィーであることが判明、昭和40年8月完全に歩行不能となる。

社会的な効用が期待できないと「就学免除」の美名のもと、長い間在宅のまま放置されてきた。教育の場からしめだされた正一君が教育を受ける唯一の場、訪問学級。週3回6時間の授業が昨年からやっと実施された。正一君にとってそれは数少ない社会への窓口でもあった。先生が訪問するようになって、正一君は物を知ることにとん欲になった。正一君の室と壁一つへだてて弟の雄二君の室がある。中学3年、日野リトルリーグの最優秀選手だ。ギターをひき青春をうたうその姿に影はない。壁のむこうには、死とたえず対峙するもう一つの青春がある。夕餉のひととき、正一君を囲む家族に笑いがたえない。正一君のために全財産を投げだした父も母も、その苦勞は見せない。「ぼくなにか生まれてこなければ良かったんだ」と両親を困らせた正一君も、今は素直に父の話しに耳をかたむける。

お風呂の中でも続けられる親子の対話。その中から正一君は自分の命の刻限を知り、生きる重さを知った。我が子の為職を辞し、今は全国難病団体会長をつとめる(父左門さん46歳)は、「人間はいつまで生きられるか、ではなく、どう生きたか問題なのだ」とさとした。

正一君は今、陶芸にうちこんでいる。不自由な手で形のない土くれに形をあたえ、自らの魂をふきこもうとしている。生きていた日々の証しに。父から「20才までの命」と知らされた時、正一君は「短かすぎる」と思ったという。今、正一君がおそれているのは、死ぬことではなく、空しく生きることだ。正一君は詩う。

陶器をやきあげる釜の火の色は美しい  
良い作品を生み出そうと  
精一杯もえているからだ  
そして真けんに生きる人間の姿もまた美しい  
くいのない人生をおくろうと  
精一杯もえているからだ  
完全にもえつきること  
それを目指して行きて行きたい  
たとえぼくに明日はなくとも

日曜の朝、重く閉ざされていた石川家の扉が開く。教会へ行く正一君のために。社会がどうゆれ動こうと、同じ世代の人間がどのように青春を謳歌しようと、正一君の生への衝動をつき動かすことはできない。かつて正一君の生命の前になにごともなしえなかったように。病状は刻一刻と進んでいる。さし迫る死、正一君を教会へかりたてるものは決して安らかな死への願ではない。その心は、今も尚、生きることにむけられてある。

筋ジストロフィー、その患者は全国で3万人を数える。